

第7回宇都宮平和映画会

～東京大空襲～

「ガラスのうさぎ」

1979年 国際児童年記念映画

スタッフ

*製作：武田 敦 野原嘉一郎 *原作：高木 敏子 「金の星社刊「」ガラスのうさぎ」より」
*脚本：立原りゅう *監督：橋 祐典 *撮影：山本 駿 *照明：伴野 功
*美術：平川 透徹 内田 欣哉 *録音：本田 孜 *音楽：小六建次郎
*出演：蛸名 由紀子 長門 裕之 長山藍子

かいせつ

「ガラスのうさぎ」は、著者の高木敏子さんが、亡き両親と2人の妹の三十三回忌にその供養と、戦争を知らない子ども達に戦争の悲惨さと恐ろしさ。平和の尊さを知ってほしいという願いから、「私の戦争体験」という小冊子をつくり、知人に配布したものが加筆され、77年12月出版されたものです。

12才の少女の体験と目を通して書かれたこの本は、「母が子に語る戦争体験」として大きな感動をよび、すでに30万部をこえるベストセラーとして読みつがれています。

戦争体験の風化が伝えられる今日、戦争を知らない世代にその実体を伝え、平和の尊さを次代にうけついでいく願いをこめて、今年1979年国際児童年をむかえるにふさわしい企画として、1年がかりで映画化の準備がされてきました。

製作は、数々の名作を生みだした大映の伝統をうけつぐ大映映像に、教育と平和の課題に一貫してとりくんできた共同映画全国系列会議が提携し、上映を担当します。

監督は、「どぶ川学級」をはじめ独立プロで活躍する橋祐典が。脚本には女流ライターの立原りゅうが心をこめ、全スタッフが情熱をもってとりくみました。1979年3月10日撮影開始、6月完成。

ものがたり

昭和19年 - - 日本の敗色はこくなっていた。米をはじめ食料品、衣料品等生活必需品は配給制度になって久しかった。

青年は次々と戦場にかりだされ、学生も学徒兵として出征し、壮年男子も軍需工場に動員され、14才以上の女学生も女子挺身隊員として徴用されていった。

ここ、東京両国の川井ガラス工場も、父の房雄が最後の「ガラスのうさぎ」の置物をつくっていた。工場は軍の指定工場となり、房雄も満州へ技術指導に行くことになった。小学6年生の敏子の2人の兄も、すでに特攻隊員として志願していった。

長兄の昭雄は戦地への出発を前に家族に別れをつけにくるが、病弱な母、よし子の「命を大切に...」という言葉に、「命は陛下とお国にささげているんだ。俺たち若い者が死ななくて誰が死ぬんだ」と反撥し、悲しい別れとなってしまった。2日後には次兄、和雄の面会日だったが、やむなく敏子1人が西宮へ会いにいった。

やがて米軍機による空襲ははげしくなり、都市から学童疎開が始まり、敏子は妹の友子と文子をつれ二宮へ疎開したが、幼い妹達は母恋しさに東京に逃げ帰ってしまう。1人のこった敏子に、母と妹が3月10日の東京大空襲で行方不明という知らせが。だが遺体は見つからず、工場の焼跡から無残にとけた「ガラスのうさぎ」を父と二人掘りだすのだった。

8月5日、二宮駅で新潟へむかうため敏子と父は列車を待っていたが、突如P51米軍機がおそいかり、機銃掃射によって目の前で父は殺された。ひとり残された敏子は、涙こらえて父の遺体を運び、埋葬の手続きをすませるのだった。悲しみにうちひしがれ、夜の海に歩み入る敏子だが、「私が死んだら誰がお父さんのおとむらいをするの...」暗い波の中から再び立ちあがった。

8月15日、父の死から10日たらずで敗戦となった。次兄の和雄が復員してきた、「大きいお兄ちゃんが帰ってきたら3人でガラス工場をつくろう」と敏子は、亡き父母から託された貯金を兄に渡した。

焼跡に家を建てる間、また敏子は1人、叔母のもとに身をよせた。しかし、敗戦の混乱の中、生活はきびしく誰もが生きること必死だった。再び一人上京した敏子、長兄の昭雄も復員してきたが、その喜びもつかの間、「3人でガラスのうさぎをつくろう」という願いも、ついえさってしまった.....。

焼け溶けた「ガラスのうさぎ」を、両親の墓に埋め、12才の少女 - - 敏子はけなげに荒廃した街へ歩きだす.....。

(上映時間1時間45分)

あしたがわかる わたしがかわる



映画「ガラスのうさぎ」上映
宇都宮平和映画会代表

上澤 美男さん(66)

太平洋戦争に翻弄される家族を通じ戦争のむごさを描いた映画「ガラスのうさぎ」。宇都宮市若草1丁目のとちぎ福祉プラザで19日に開かれる上映会を主催するのは、宇都宮平和映画会だ。

来見!

映画は童話作家高木敏子が自身の戦争体験を記した同名作が原作。少女敏子は兄2人が出征し、東京大空襲で母と2人の妹を失くす。その後、空襲で父までも失うが、懸命に立ち上がろうと

戦争のむごさ 若い人に

する。

「『集団的自衛権』という言葉を知って、どういふ状況にならぬのか実感がない人も多いたろう。戦争は人が血を流し、死ぬということを知ってほしい」と同会代表の上澤美男さんは観覧を呼び掛ける。

同会は2004年12月、宇都宮地裁に自衛隊のイラク派遣差し止めを求める「イラク派兵違憲訴訟」を起した原告団有志が設立。毎年7月12日から8月15日までの同市平和月間に合わせて上映会を重ね、今回が7回目となる。「若い人に見てほしい」との思いから15歳以下は無料。

(島野剛)